

[概要]

本稿では、富山県に伝わる河童伝承を行動と結末に基づいて類型化し、その中でも特に「妙薬を授ける伝承」と「人間を祟る伝承」という二つのモチーフに注目することで、恩恵－害悪という両義的な語りが地域社会の歴史的経験や社会構造といかに結びついてきたのかを明らかにすることを目的とした。収集した伝承の総数は67話であり、中村(2019)の行動分類を参照しつつ五つの類型を設定して河童の行動を分析した結果、富山の河童は恩恵性と害悪性を媒介する両義的な存在として語られていることが確認された。さらに、妙薬譚と報復譚を個別に検討したところ、妙薬譚は主に船運や流通が発達した地域に分布しており、修験道や売薬文化の関わりから、河童が知恵や技術を媒介する存在として語られてきた可能性が示された。一方、報復譚は五箇山を中心とした閉鎖的な地域に集中しており、厳しい共同体規範や排他性、境界・差別意識といった地域内部の社会構造が河童像に反映されていると考えられた。こうした富山県の河童伝承は単なる怪異譚ではなく、時代の変化に応じて像を変え、地域社会の歴史的役割や共同体の境遇を象徴的に表現するメディアとして機能してきたと考えられよう。

キーワード：河童伝承，類型化，両義性，機能